

り、造材事業独立の途となりました。

2 独立事業

家族の養育のために独立した事業として左の通りです。

- (1) 薪炭製造販売業
 - (2) 用材林伐採販売業
 - (3) 宅地造成販売業
 - (4) 健康食品販売業
- ## 3 事業遂行生活の悲喜こもごも

- (1) 町有林売買に関し訴訟上の被告とされ、十一年を要し、自ら法廷に立ち、最高裁判所の勝訴判決を得て損害賠償を得た事
- (2) 宅地造成時に線引行われ、格差被害発生した事
- (3) 健康食品の製造販売に食塩とカルシウムを二十年間自ら使用実験し、健康と長寿には毎日カルシウムの摂取が欠かせない事を体験した事

抑留記

栃木県 橋本 正男

昭和十六（一九四一）年七月召集により高田三十連隊に入隊、二、三日後大阪から朝鮮釜山に上陸。六日ほど後、汽車にて朝鮮羅南に着く。すぐに歩兵七十六連隊にて訓練三カ月後、日、満、ソの三国国境の警備に当たる。毎日が警備と陣地構築であった。

昭和二十年八月ソ連参戦のため陣地を撤収して関東軍の陣地から反撃する予定にて移動中停戦になり武装を解除され、北朝鮮富寧に収容され、翌年五月入所し、ハバロフスクの手前のミハイロフカ地区の人跡未踏の山林を伐採して軍用道路を作るとの事で我々を案内したのであるが、始めから野宿をして翌日から伐採と道路工事であった。我々に渡された道具は鋸、斧。鋸は二メートルで二人挽き、斧は片手で枝打ち用で数が少なく、土

工用具は鶴嘴、金梯子、スコップで数が少ないのであった。我々仲間の中には器用な者が多く、鋸はヤスリで目立てをしたり、斧は石を見つけて研ぐなどと、鶴嘴は轆ふしじを作って焼き、先を尖らして使ったのである。鍛冶屋の心得のある者がいたので大いに役立った。

我々の宿舎も手作りであり、夜の明かりは車のタンクから抜いたものを使っていたので全員煤けた顔をしていたのである。また伐採する大木は五葉松が多く、松脂が出るため鋸に塗るためにも車から燃料をとる必要があった。

ソ連側は常に実行が先で計画は後なので、毎度やり直しをするのでノルマも決めようがないのだと思った。測量等はせず大体の見当で進むので無駄な仕事を随分やったものである。

このように無計画の仕事をやらせられるので我々も労働する気持ちが出るわけがない毎日であった。

昭和二十二年九月末のこと、ロスケ側から東京

ダモイだから支度をしろとの命令が出たのであるが、毎年五、六回の命令なので誰も本気にしなかったが命令には従うほかになく、我々は各人荷物をまとめて炊事の道具と土工の道具、伐採の道具等の外、建物をバラしてその材料を各人が手分けして持ち、ホームレスの引越し以上の大移動であった。三時も過ぎると日が暮れて、大休止の合図で休むと秋の日は釣瓶落としの通り、辺りは真っ暗となる。また命令が来て、今晚はここに泊まるので支度をしろとのこと。そのつもりで準備していると、ここで越冬との命令に、ころころと変わって、毎度計画の変更ばかりで当てにはできないが、従わねばならない運命なので計画をやり直し、冬に耐えられる建物にしなくてはならず、暗い中では計画の立てようもないので幸いに炊事係りが火種を持っていたので暗い中を白樺を求めて皮をはぎ、火を起して辺りを明るくして立木を探し、檜の木や樅の木の中から目通り径一〇センチほどの木を選び出して切り、太い物は柱と梁に使い、細

い物は垂木たなまきとなし、探し出してきた藤蔓で縛り、バランスのとれたところで土の付いた張り芝を載せ始めたところ、その重みで倒壊したのでやむなくバラして初めからやり直しとなった。仕方なく藤蔓探しの者を三倍ぐらいに増やして、今度は梁に垂木を良く縛りバランスを見ながら張芝を揚げたのでようやく出来たのであるが、切妻の所は以前の建物から持参した椽の皮にて塞ぎ、出入口のドアも前の建物から持参したものを使ってようやく朝方に終わり、少しうとうとしたら起床の鐘が鳴り、いつものように作業に出されたが反抗できない悲しい運命であった。建物の場合は諸橋さんが棟梁なのでこの日も諸橋さん外三人ぐらいで建物の補修をしてどうやら冬を越せるようになった。この付近はマイナス三〇度まで下がり三五度になったからとて作業中止になったことが三回ぐらいあったようだった。シベリアの風は強く、目を開けていられぬこともあったが、それよりも風の日には軽い雪が出入り口を埋め尽くし、せつかく作

ったドアも出入りのたびに壊される始末であり、作つてある階段も夜トイレに起きる者が近くで小便をするために滑り台のようになり危ないので、毎朝鶴嘴にて階段を作り直すのである。これを怠ると飯上げ当番が滑ろうものなら大変なのである。毎日の朝夕の食べ物は雑炊だから滑って転んだら拾いようが無いのだから慎重に運んだのである。

昭和二十三年一月ごろアクチーフと一緒に若くて肉付きの良い者が二人我が隊に入つて来たが、その二人は毎朝宮城遥拝をやり、弥栄と叫びながら天突き運動を三十分ほどやり、我々にも一緒にやりましょうと奨めたが寒いので誰も行かなかつた。そのうちにこの二人は段々と痩せてきたのでどこかの病院へ入院して死んだとの話だった。寒い時には暖かな所にいるのが一番良いようだった。舎内の暖房はドラム缶を縦にして煙突をつけたものであるが、外はマイナス三〇度以下でも舎内は温かく、火を絶やさぬ限り夜でも楽に過ごせたのである。

虱は公平に全員にたかっており、瘦せた我々を更に苦しめるのであった。着替えも無い我々は水もないので雪の日に雪を飯盒に入れて解かし、その中に襦袢を入れて煮ると虱は卵と共に死んでしまふのである。三分ぐらいして飯盒から引き出して舎内に吊るし、飯盒には新しい雪を足して袴下と禪は一緒にして煮たのである。見た目は汚くとも二、三日は虱もいないので大変気持ちが良いのであった。

ソ連の人も虱がいるとみて、風呂の使役に出るとの号令があり、応募して行ったのは部落の共同風呂で、七日に一度沸かすのだとの事である。その部落の風呂はサウナ式で、建物は十五畳ほどの広さで校倉造りで、板敷きになった建物で、正面に高さ一メートルほどにピラミッド型に平たい天然の石が積んであり、一段下がった所に焚口があつて使役の一人が焚口にて火を焚くと煙が室内に充滿して一寸先も見えなくなつたところで、屋根には予め一メートル四方ほどの穴が開けてあつて、

普段は板で塞いであるが煙が立ち込めると板を取り払つて煙を外に出し、三時間ほど火を焚くと石が焼けてくるので、一人は傍らのビヤ樽へ五十メートルぐらい離れた井戸から水をくんで入れておき、楢の葉のついた小枝を水にぬらし、焼けた石を叩くと室内は蒸気が充滿するので前以て屋根の穴は塞いでおくので大変に温かく、外から入った人は寒中なので厚着をしているから桁に五寸釘を打ち、着物はなるべく間隔を開けてぶら下げおくと入浴中に虱も熱いので外に出て着物から全部落ちるので虱退治になるとのことだった。

人は上下二段の棚があり、入ると直ぐ楢の小枝で焼け石を叩き上段に上つて汗を出し、下の段にて垢を落すのだとのことであつた。

虱退治のためにマイクロボスが二台一組で来たことがあつた。それは我々の着物を全部脱がせて車の中に吊るし、裸になつた我々は別の車に入るとそれはシャワー室で、天井から僅かな水がチョロチョロと落ちてくるので、その水で身体を洗う

のであるが、一個の穴の下に三人ぐらいで身体を濡らすと次々と後から入って来るので身体と手拭を濡らすのがやつとの有様で、風邪をひかないように始めに入った車から自分の着物を見つけて出して着るのであった。

その着物の熱い事は驚いたが、虱は死んでも卵は死なないうであつた。

車に一度に三十人ぐらい入り、芋を洗うように混雑するのであつた。一冬に二回ぐらい来たと思う。このように寒い冬に虱と南京虫に、夏は蚊と蚋がよに攻められて血を吸われるので痩せる一方であつた。

私は復員後雑誌で見たのであるが、ソ連人が米国へ旅行したところ虱退治の車も設備もなく大変不自由を感じ、米国といえども虱については後進国だと感じたそうだ。

私は虱と南京虫には随分悩まされたが、作業現場においては蚊と蚋にも悩まされた。

昭和二十三年の初めごろ、夜中に仲間四人と共

にドームを抜け出しコルホーズの蜜蜂の巣を盗みに行ったがその夜は風もなく、月は煌々と輝き昼間のような中を五百メートルくらい離れた蜜蜂箱群に近寄り、片端から開けてみたところ満タンの巣もあれば空の巣もありで、どれが良いのやら分からぬので丁度中くらいの巣を一枚見つけたのでそれを抜き取り箱の蓋を元通りに直して大急ぎで引き上げたが、途中で我慢が出来ず四等分に分けてそれぞれが口に入れたところその甘いこと、天下一にこんなうまいものは他にないと思つたのだ。蜂の巣は障子紙のように出来ていて、その中に子供が入っているようであつたが暗くて良く見えないのでそのまま半分くらいを食つて自分の場所に入り込んで、朝飯も普通に食つて知らぬ顔して作業整列しているとコルホーズのカマンジールが駆け込んで来て、昨晚コルホーズの蜂蜜が盗まれたが犯人はこのヤポンスキーの中に居るから名乗り出よとて叫んでおり、歩哨と喧嘩をしているようであつた。我々は常日ごろ、公共の物を盗ん

だ者は銃殺と言われているので、馬鹿馬鹿しいので誰も名乗らず喧嘩をしているのを幸いに隠しておいた残りの蜂蜜を全部食べ、木の枠は昨夜のうちにストーブにて燃やしたので何の証拠も残さず作業現場に行ったのだった。ところが一時間くらいたつたころから喉が渇き、水を飲んでも飲んでも治らず、そのうちに下痢が始まり三日ほど続いたので四人はげっそりと痩せてしまった。我々が作業に出た後、例により私物検査をしたようだが、疑わしい物は何も出なかつたので我々は心の中で万歳と叫んだのである。

抑留者は毎日腹が減っているので仕事を怠けることを常に考えており、通訳の発案で歩哨に勉強を教えることになり、寒い時には二人くらいを焚き火係として一日中焚き火を絶やさぬようにする。一人は算数を教えるのである。彼らには掛算がないので先ず九九を教えるなど一日かかりで教えるのでその時は仕事のノルマなど忘れさせて機嫌を取り、作業をする者は疲れなないように時々体を動

かして楽をするなど色々考えて我々の都合の良い様に仕事を進めたが段々と進んでくるとピタゴラスの定理を訊いたが殆どの兵隊は分からなかった。彼等は足し算と引き算しか出来ないもので、その基礎から教えるので時間の掛かること甚だしい。我々はその狙いであつて歩哨を現場に近づけないようにしてサボっていたのである。

丁度そのころ我々は来るべき夏に備えて道路の補修に出た時である。そこは広漠たる扇状地で吹きさらしなので寒く、大地は一メートルも凍結しているのでノルマは砂利二・七立方メートルを凍土の下から取り出すのであるが二人一組で穴を掘り、一メートルの凍土を抜けると見事な砂利が出るのであるが、その砂利を路肩に高さ一メートル、幅二メートル、長さ二・七メートルが二人のノルマであつたが、早く終わると明日は三メートルになるので毎日歩哨の機嫌をとりながら仕事をしたのである。その様にして能率を上げないように時間まで仕事をしていたのである。早く終われば翌

日は必ずノルマが多くなるからだ。彼らはノルマが有ると言うだけで書いたものはいらしく、その時の機嫌によってころと変わるのだった。

我々は時々歩哨と議論をしたがソ連では死者は土葬にするが、日本では火葬にするのは残酷だと言うが、冬のある日曜日のことである。その日は三十センチくらいの雪があつた。破れた靴下を縫い糸にして軍服の修理をしている時であつた。五人使役に出るとの連絡があり、通訳に何をするのかと聞いたところ葬式との事なので、私は普段樂をさせてもらっている。その日は率先して名乗りを上げて他の四人と共に歩哨に連れられてホルホーズの事務所へ案内された。そこにはカマンジールと事務員らしき者一人で、二人だけである。しばらくするとどこからか馬櫓に乗った若者が現れ、我々の中から三人に角スコップ三丁を持たせ穴掘りに行く素振りをして雪煙をあげて去って行った。残った二人はボンヤリしていると事務員が隣の家から細長い箱を引きずって来たので中を見

るとうす汚いパジャマを着た老人が入っており、雪降る中を道路まで引き出し、彼一人で家から板を二枚持ち出して来て箱に蓋をしたのであるが、その時焼け跡から拾ってきたような古釘を一枚の板に二本しか使わず釘の頭を二センチほど残しておくのでそのわけを尋ねたところ、狼が食べやすいようにするのだとの事であつたが、ソ連人は嘘つきが多いので本気にはしなかつた。

一方穴掘りに行った連中は三十分くらいで帰って来たので随分早かつたのではないかと尋ねたところ、吹き溜まりの雪を三メートルほど掘っただけとの事で疲れた様子もなかつたので不思議に思っていたが、それより気がかりなのは葬式ならば坊さんか牧師さんが来てお経を上げるものと思つて待っていたが誰も現れず、穴掘りの三人を乗せて帰った。馬櫓には屍を入れた箱を乗せ、息子らしき若者が箱にまたがり馬に鞭当てると馬櫓は雪煙を上げて走り去った。

我々にはご馳走までは行かずとも枕団子くらい

出るだろうと思っていたが何も出なかったの仕方なくトボトボと帰ったが、馬か牛ならば片足くらいはもらえたのにと思い残念でした。

二カ月ほどしてから屍を埋めた近くを通ったのでトイレに行くふりをして雪の吹き溜まりに行ったところ、見覚えのある箱は蓋がはがされパジャマはずたずたに破れて転々と引きずられたようになっていたので、夜行性の狼が死体を引きずる途中にパジャマは脱げたのだと思った。コルホーズのカマンジールの言った事は本当らしかった。

屍を火葬にするのは残酷か、狼に食わせるのが残酷かは分からないが、凍土を一メートル以上掘って埋葬するのは容易ではないので合理的かも知れんと思った。人間も死ぬと粗大ゴミのように扱われる習慣のようであった。私達も狼が食ったのか狐が食ったのかは目で確かめたのではないから確実とは言えないが間違いはないと思うのです。

【執筆者の紹介】

大正八（一九一九）年三月二十九日 新潟県中魚

沼郡津南町で出生

昭和三年三月二十五日

村立宮野原尋常高等小学校高等科卒 親元において農業に従事

昭和十六年七月十五日

召集により高田三十連隊を經由して、北鮮羅南歩兵七六連隊にて一期の教育を終了し、日・満・ソの近接する国境警備の任務に服する

昭和二十年八月九日

ソ連参戦により直ちに戦線に加わる

昭和二十年八月十五日

終戦よりソ軍の指揮下に入る

昭和二十一年五月

シベリアにおいて労働に従事

昭和二十三年十月二日

舞鶴上陸復員

昭和二十五年八月

栃木県那須郡西那須野町
三島に住所を定むる

昭和五十三年

栃木県土木事務所に勤務
する傍ら二級建築士の資
格を得ると共に土地家屋

昭和三十七年

調査士の資格も取得す
土木事務所を退職し独立
して建設関係の会社を設
立、今日に至る

(栃木県 野沢 芳夫)

シベリア抑留記

栃木県 前沢 韶

一

1 栃木県下都賀郡豊田村上初田に出生(父、
母、兄弟七人)

二

2 昭和十六年 県立栃木農学校卒 農業従事
1 昭和十九年十一月 宇都宮三六部隊入営
一週間後出発

小銃五人に一丁 帯剣
竹の水筒 地下足袋

2 二十年五月末 十二月初 陣二九九三部隊入隊
陣師団満州へ移動 小

3 同年七月二日 田部隊銭化店入り
石頭予備士官学校入校

二十年八月九日 ソ軍侵攻を教育隊で知
る三千六百人の候補生